

〔東遊記後編二〕新潟

越後國新潟は、信濃川其外の川に落ちて海に入る所なり、海口近くの一、二里の所は、川幅廣き事一里二里ばかり、渺々として湖の如く入り海の如し、岸より岸まで水甚深く淺瀬といふものなし、千石二千石の大船といへどもいづくまでも自由に出入りす、誠に川湊にては日本第一ともいふべし。○中略四面打開きたる地にて、北海の廻船出入の大湊なれば、越後第一の繁華の地にて、青樓多くしてにぎやかに、又越後一國の米不殘此湊に出るゆゑ、諸大名藏多く建つ、只北方雪國の事ゆゑ冬に成ぬれば河水氷閉て、舟の通行絶へ、陸地も雪深く、海上は十月より三四月頃までは、廻船も出る事あたはざれば、夏一季住べき國といふべし。

〔新潟繁昌記〕越之爲州、東南皆山、西帶海而北走、所謂沃土千里、百二之國、米山嶺自海崛起、橫絕州之中央、嶺北隔十數驛、彌彥、角田、兩岳、屹立聳空、阿賀川自奧來、信濃川自信至、聞信濃川合、八千八水、到新潟而入海、新潟原一沙嘴、舊稱船江、桑海之變、沙漸隆、地漸拓、明曆年間、民棄原村徙焉。原村今不當今絶時開莽者三氏、曰齋藤、曰宮川、曰伊藤。伊藤氏今絶太平之澤被及海隅、入戸漸密、生齒漸滋、萬治年中、開渠控信濃川、豎三橫五、以界坊、船隻之便、四方往還坐而達、街南爲頭、北爲尾、五道分達、西一道曰寺坊、以佛刹櫛比也、其東一道曰古坊、此爲驛路、又東二道曰片原、曰新坊。或曰本坊極東一道曰他門、坊凡三十餘、他門東北隔渠得二洲、曰榛林、曰毘沙門、入戸通計一萬、寺坊之西瀕海有村、曰寄居、負龍推出、推卽海、佐渡島可撫矣、是此港之槩略也。

〔太平記七〕先帝船上臨幸事

〔書言字考節用集 乾一坤〕那和湊 伯州 汗入郡
主上船底ヨリ御出有テ、膚ノ御護ヨリ佛舍利ヲ一粒取出サセ給テ、御疊紙ニ乗セテ、波ノ上ニゾ浮ラレケル、龍神此ニ納受ヤシタリケン、海上俄ニ風替リテ、御座船ヲバ東へ吹送り、追手ノ船ヲ